〔原 著〕

退職移行期にある高齢男性のヘルスプロモーションに関わる要因の検討

掛 本 知 里*

ELDERLY MEN IN RETIREMENT PERSPECTIVES AND PRACTICES RELEVANT TO HEALTH PROMOTION

Satori KAKEMOTO

高齢化がすすむ中、ヘルスプロモーションに関わる活動が注目されている。しかし、高齢男性、特に退職者に注目したヘルスプロモーションプログラムに関わる研究はまだ少ない。そこでここでは、大企業を退職し、退職移行期にある高齢男性のヘルスプロモーションに対する考え方、およびその実際を概観することを目的とし、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた、因子探索型の研究を行った。なお、研究対象者は、大企業を退職し、現在、退職移行期にある高齢男性６名であった。結果、健康については《健康提示の二重性》の中で、自分自身と他者に対する健康の意味づけを行い、また、《社会的自己価値確認としての就労の継続》をすることで、就労を媒介として、社会における自らの価値を確認していた。さらに、彼らは社会における自分の位置や価値を確認するために、《社会的自己価値確認としての結びつきの維持》を行っていた。その結びつきは人間関係の変化や様々な環境の変化に伴い、変化していくものであった。退職移行期にある高齢男性は、このような中で一定の生き方を選択し、それが、結果的にヘルスプロモーションへとつながっていた。

キーワード：ヘルスプロモーション、高齢男性、退職者、グラウンデッド・セオリー・アプローチ

Abstract

Health promotion programs for the elderly are important in our aging society. However there are few studies focused on retired men to guide the development of such programs. Thus, the purpose of this study, which used an advanced grounded theory approach, was to identify perspectives and practices relevant to health promotion among elderly retired men. Informants were six men over 55 years of age who had retired under company rules from life long employment in a large business and were now engaged in their "retiring process."

These men confirmed the meaning of their health for themselves and others through "double presentation about their health." Important to the retired men was "continuing employment as confirming self-value in their society" and "maintaining relationships with others in their social worlds as confirming self-value in their society." However, employment and social relationships could change with changes in human relationships and changes in the environment. Each elderly man in the retiring process found his own way of daily life by confirming the meaning of his health and value in his society. Each was promoting his own health.

Key words：Health promotion, elderly men, retirement, grounded theory approach

＊東京女子医科大学 看護学部（Tokyo Women's Medical University, School of Nursing）

Ⅰ．はじめに

先進工業国において、人口の高齢化が急速に進んでいる。どの国においても社会の高齢化は大きな問題である。その対策として、昨今、ヘルスプロモーションが注目されるようになってきた。WHOはオタワ憲章の中で、その活動の重要性を強調し[1]、英国や米国においては、国民のヘルスプロモーションに向けた活動が展開されている。また、日本においても、平成12年からは、「21世紀の我が国を、すべての国民が健やかで心豊かに生活できる活力ある社会とするため、壮年期死亡の減少、健康寿命の延伸及び生活の質の向上を実現すること」を目的として、「健康日本21」の活動が展開されている[2]。

高齢者のヘルスプロモーションの有効性について、有病率の低下や早期の死亡や受傷の防止において効果があるとされている[3]が、費用対効果の側面から考えると、その有効性を疑問視するむきもある。しかし、全体的には、ヘルスプロモーションを推進することにより、早期死亡や障害の発生を予防し、個人としては活動性やQOLを高め、社会全体としては医療費を節減することが期待され、ヘルスプロモーションに関わる活動は、積極的に推進されている。

一方、ヘルスプロモーションは多様な意味の下で用いられている概念であり、それぞれ、異なった対象集団においては異なった意味の下で用いられることがある。さらに、量的な研究においてヘルスプロモーションのアウトカムは、ライフスタイルの改善や、有病率や死亡率といった指標で示されることが多いが、現象学やグラウンデッド・セオリーを用いた研究によると、高齢者にとってのヘルスプロモーションの意味はより精神的・霊的な側面が強調される。高齢者のヘルスプロモーションに関わる研究を進めていくにあたり、対象集団に適合したヘルスプロモーションの概念を明確化し、研究を進めていくことが重要になる。

Ⅱ．研究目的、意義、方法

1）研究目的

本研究の目的は、定年退職後再就職状態にある「退職移行期」の男性に着目し、彼らのヘルスプロモーションに関わる要因を探索的に明らかにすることである。

2）本研究の意義

時代の流れとともに、雇用形態も変化しつつあるが、日本においては終身雇用制がまだ主な雇用形態であると言える。終身雇用制における雇用形態の中で、労働者は雇用され、一定時期になると、退職を余儀なくされる。労働者および退職者の健康管理について、雇用期間中は雇用主が健康管理サービスを提供するが、退職後は、一般的には個人が自分自身の健康を管理することが基本となる。

高齢者の健康については多くの研究がなされているが、高齢男性のみに焦点を当てた研究は未だ少ない。例えば、Whetstone[3]は、男性に比べ女性のほうがセルフケアを行っており、健康について意味を見出していることが多いと述べており、高齢者のヘルスプロモーションに関わる研究についても、男性に比べ女性を対象としたものが多かった。しかし、男性の健康についても、女性に対する研究と同様に焦点を当てることが重要であり、特に、退職移行期における健康について焦点を当てて検討することは、退職後の活動性の維持やQOLの向上を考えていくうえで重要なことと言える。しかし、文献を検討した結果、特に退職者を対象としたヘルスプロモーション活動はほとんどなく、広く高齢者を対象とした活動が多かった。そこでここでは、大企業を退職し、退職移行期にある高齢男性のヘルスプロモーションに関わる要因を明らかにすることを目的として、研究を行った。

3）用語の定義

本研究で用いる用語である「ヘルスプロモーション」「退職移行期」については以下のように定義する。

①ヘルスプロモーション

ヘルスプロモーションとは、人が必要な社会的施策、もしくは個人的活動を通し、その健康を維持、もしくは増進すること。

②退職移行期

一定時期に、年齢が主な原因で、自発的もしくは強制的に職を辞し、その後、再就職を繰り返しながら、完全に職を失うまでの期間。

4）研究方法

本研究ではグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いる。この研究法はGlaserとStraussによる「The Discovery of Grounded Theory」[4]において示された方法論である。グラウンデッド・セオリーの基本特性は、社会調査を通じて体系的に獲得されたデータに基づく分析から理論を発見することである[4]。これは、GlaserとStraussがその研究をすすめる過程の中で生み出さ

れた理論であり、方法論であるが、プロセスとしての理論である[5]と言える。グラウンデッド・セオリーは、①データに密着した分析から独自の概念を創り、それらによって総合的に構成された説明図式であるということと、②社会的相互作用に関係し、人間行動の予測と説明に関わり、同時に研究者によってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定されている範囲内における説明力に優れた理論である[6]。また、木下は研究テーマの設定における研究的距離につい述べている[5]。本研究の研究者は、かつて大企業において保健師として健康管理活動に従事しており、本研究テーマについても「彼らはその後どのように暮らしているのか」といった疑問から生まれたものである。現在は、その立場にはないが、研究テーマとの距離という意味において、意識的には対象者にコミットしているものの、物理的にはある程度の距離をもった立場にあると言える。

ヘルスプロモーションは、1980年代以降、広く使われるようになった新しい概念である[7]。しかし、その意味は明確化されず、ヘルスプロモーションにはいくつもの定義があり、多様な意味の下に用いられてきた[7]。ヘルスプロモーションの概念は、未だ明確ではなく、今後理論が構築されることが必要な領域であるといえる。また、本研究は退職移行期におけるヘルスプロモーションという、一定の過渡期におけるプロセスを明確化することを目的としており、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、本研究の研究課題に適した研究手法であると考える。

木下はグラウンデッド・セオリー・アプローチには複数の方式があると述べている[6]。Glaser と Strauss が研究の過程において明らかにした研究手法ではあるが、その後二人はその研究方法論において対立し、結果、現在においてグラウンデッド・セオリー・アプローチとして、いくつかの異なった研究手法が存在する。本研究においては、よりデータに基づいた、データ全体の文脈の中から明らかになる意味合いを重視し、また、研究手法に関して、より適したスーパーヴァイズを受けることが可能な、木下による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを研究手法として用いることとした。

5）研究対象

調査時点において65歳以上で、大手企業を定年退職後に再就職状態にある男性で、自立した日常生活を営み、通常の会話が行えるもの6名を対象とした。なお対象者は、N社およびF社の退職者2名に依頼し、条件にあった対象者を紹介してもらい、同意が得られたものを研究対象とした。

6）研究調査期間

平成13年8月～9月

7）データの収集および分析

インタビューは対象者の了解の下、録音しながら実施する。録音したインタビューデータはインタビューメモを参考に全文テープおこしを行い、サマリーを作成した。ヘルスプロモーションに関わる因子を明らかにすることが研究目的であったが、ヘルスプロモーションという言葉が一般に浸透している言葉ではないため、インタビューは、現在の自分の健康状態に焦点をあて、インタビューを導入するための質問としての「現在の健康状態について」、および、ヘルスプロモーションを通常の日本語訳である健康の維持増進に置き換え、「健康を維持・増進するために行っていることについて」を質問内容として開始した。各1回、約1時間程度を目途として、聞き取りを行った。

サマリーおよびインタビューの全部はその内容に関して対象者にそれぞれ返却し、内容を確認してもらった。なお、内容に関して誤り、公表したくない部分についてこの際に指摘してもらい、訂正および公表したくない部分は削除を行う旨、事前に説明を行った。

整理したデータについては、修正版グラウンデッド・セオリーを用い、分析を行った。データ全体を概観したところ、健康を中心に質問したものの、実際には健康に関わることと、それ以外に関連することが一緒に語られた。特に、その人たちの生き方の選択とその意味付けに関わる内容が多く語られ、健康についてはその関連の中で述べられていた。データに密着した分析を行うグラウンデッド・セオリー・アプローチの原則[5]に基づき、分析テーマの調整を行い、分析テーマを「退職移行期にある高齢男性が自分の生き方をどう選択しているか」に定めた。このテーマに基づき分析を行い、その中から健康に関わることがらがどのように浮上するかに注意を払うこととした。なお、分析に際しては、修正版グラウンデッド・セオリーの専門家にスーパーヴァイズを受けながら、分析を行った。

8）倫理的配慮

インタビューに関して事前に調査内容を説明し、本人の同意を得た後に調査を行うこととした。インタ

ビューは対象者が希望する場所で、プライバシーが守れるように配慮し、実施した。調査を実施する際、今後の研究を進めていくために、会話内容を録音する必要性についても事前に説明し、了解を得たのち、実施した。了解が得られない場合は、インタビューメモのみを用いることを事前に伝えていたが、録音を断られたケースは無かった。なお、インタビューメモを取ることについても事前に了解を得た。インタビュー結果については録音したテープに基づき、逐語録およびサマリーを作成し、調査対象者に内容の確認を行った。この際、対象者が削除したい部分、訂正したい部分についてはその要求に応じることとしたが、そういった求めは無かった。なお、インタビューを録音したテープは、逐語録を調査対象者に確認した後、破棄することとした。また、このインタビュー調査を途中で中断・中止したい場合もその求めに応じるむねを事前に伝えた。

V. 結果および考察

退職移行期にある高齢男性は、健康については《健康提示の二重性》の中で、自分自身と他者に対する健康の意味づけを行い、《社会的自己価値確認としての就労の継続》をすることで、就労を媒介として、社会における自らの価値を確認していた。また、彼らは社会における自分の位置や価値を確認するために、《社会的自己価値確認としての結びつきの維持》を行っていた。その結びつきは人間関係の変化や様々な環境の変化に伴い、変化していくものであった。このように自分の健康状態を捉え、社会における自分自身の存在価値を調整し確認する中で意味づけしていくことが、結果的に健康を維持増進すること、すなわち、ヘルスプロモーションへとつながっていた。

以下では、分析によって明らかになった結果について、その意味を考察しながら、記述する。なお、本文中、分析の結果、明らかになったカテゴリーを《》で、概念を＜＞で示すものとする。

1）健康提示の二重性

退職移行期にある高齢男性は、健康については2つの状態をあわせて持ちつつ、その中で揺れ動きながら、自分の健康状態を意味づけていた。

すなわち、内面的には、年齢に応じた健康状態の変化がある自分を認識し、＜年並みの健康状態の納得＞する作業を自分自身に対し行っていた。一方、外面的には他者に対して元気であることを示す、＜良好な健康状態のアピール＞を行うという、二重の健康提示を行っていた。

＜良好な健康状態のアピール＞とは、「もちろんどこも悪くない」「不思議と何にも言われたことがない」「みんな元気」のように、他者の年齢に基づく予測とは異なり、自分の仲間も含め、現時点において健康が保た

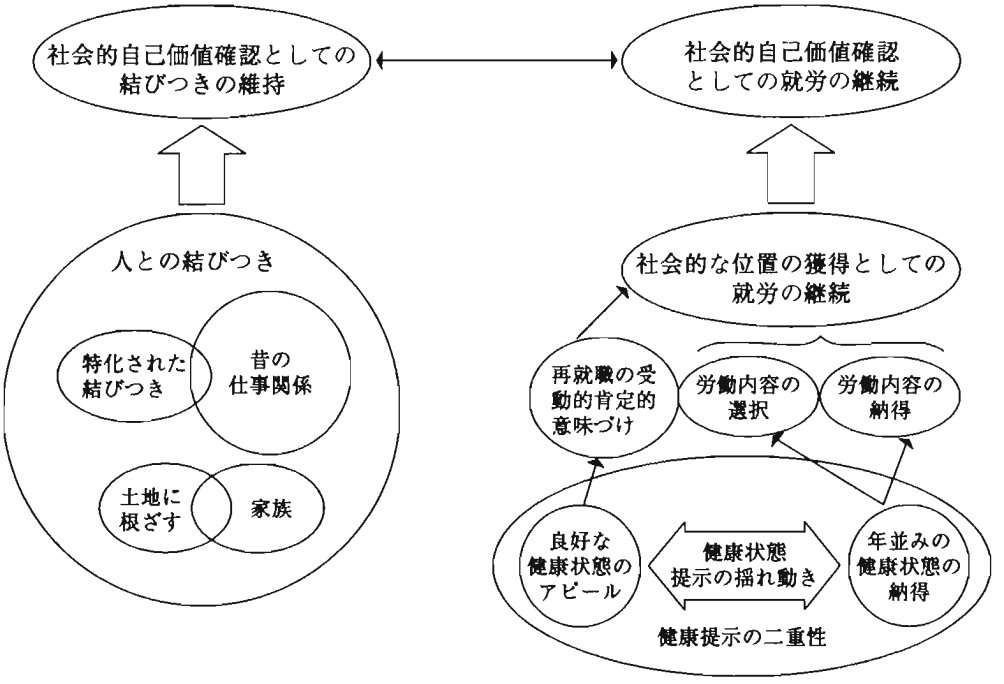

図1. 大企業を退職した高齢男性の退職移行期におけるヘルスプロモーション

れていることを他者に示していた。そしてその健康には、身体的な健康のみならず、「年とっても気力が違う」のように、精神的な活発性を保っていること、すなわち健康の精神的な側面も含んでいた。過去に直面した大きな病気について、健康問題が過ぎ去った現在においては、それはもう大きな問題ではなく、すでに乗り越えたこと、もしくは「誤診だったんじゃないか」のように、最初から無かったこととして扱い、現時点では、問題の無い健康な自分を提示していた。また、「目に光が無い」「気力が無い」と自分たちとは異なり、活発性が低下し、不健康な状態で暮らしているものがいることを示すことで、自身の良好な健康状態をより強調していた。

しかし、外に対し＜良好な健康状態のアピール＞をしながらも、「穏やかに変わっている」というように、緩やかな経過の中での年並みな健康状態の変化は感じていた。「肉体のどこかの欠陥なんて、人間だからどこかにある」「年並みに悪い」のように、同年輩の他人と同じ程度の健康上の問題があることを自覚し、＜年並みの健康状態の納得＞をする作業を自分自身に対して行っていた。

退職移行期にある高齢男性は、一定の身体能力は維持しているものの、一定の能力については徐々に衰えている状況にある。そういった身体能力に関わる変化が、外面的には＜良好な健康状態をアピール＞をし、内面的にはそういった年齢による身体的な変化を受け入れ＜年並みの健康状態の納得＞する作業を行うという、《健康提示の二重性》を引き起こしていた。

また、退職移行期というこの過渡期において、二重に健康提示を行っていくと共に、「やっていますけど‥‥気にしていない」のように、自覚的に実際は気になっている健康状態があり、自分でも何らかの配慮をしているものの、外面的にはそのことを気にしていない、意識していないかのように表現する、＜健康状態の提示の揺れ動き＞を示していた。退職移行期という役割および身体的な変化が起きる不安定な時期における、健康への不安定な思いを示すものでもあった。

このような不安定な健康状態を提示している退職者ではあるが、納得している年々変化する健康状態に対し、その変化をただ単に受け入れるだけではなく、その健康に関わる問題に対し、何らかの方法で積極的に対処する＜健康への自己対処＞を行っていた。具体的な内容は、運動、食事上の注意、定期通院などであり、無理せず、自然に自分たちの生活の中に組み込んでいけるものを自ら選択していた。

2）社会的自己価値確認としての就労の継続

就労し続け、役割をとり続けることにより、人は社会的に価値ある存在であることが確認できる。退職移行期にある高齢男性は、それぞれの状況に応じて労働内容を決定し、労働に意味を見出し、労働を継続していた。また、就労し続けることには、意味づけを行っていた。すなわち、現在の就労に対し＜再就職の受動的肯定的意味づけ＞を行い、結果として＜社会的な位置の獲得としての就労の継続＞がなされていた。

退職に伴い労働内容は変化するが、その新たな＜労働内容の納得＞し、自ら＜労働内容を選択＞することにより、新たな労働内容が決定されていた。加齢による能力や社会における役割の縮小により、労働内容は変化するが、「いずれはゼロになる」のように、その変化を受け入れた上で、自分自身と折り合いをつけ、縮小した労働内容の仕事を受け入れる＜労働内容の納得＞の作業をしていた。また、「頭を使う仕事はもうだめ」のように、この作業には＜年並みの健康状態の納得＞も影響を与えており、自分の健康状態について、その加齢的な変化を納得することが、労働内容の変化の納得にもつながっていた。

また、納得のもとに、新たな労働内容を受け入れるだけではなく、「気分良く気楽に勤めたい」「わかっているところがいい」のように、自分の生活の変化を考慮し、現在の自分に合う条件の下で、自らの意思で仕事を選択する、＜労働内容の選択＞もなされていた。しかし、この選択は、＜退職後のゆとり＞があることが前提であり、ゆとりが選択の余地を生み出していた。すなわち、経済的なゆとりを背景とし、拘束される役割から離れ、心と身体に生じた＜退職後のゆとり＞が自分にあった＜労働内容の選択＞を行う余地を与えていた。

「つぶれそうだって言うんで呼ばれて」のように、必ずしも自分の意思ではなく、人から誘われ、相手に必要とされ、「僕はこっちに来たとき、（給料が）ダウンしなかった」のように、自分としては満足していると公言できる待遇で再就職していることを他者に述べることで、＜再就職の受動的肯定的意味づけ＞を行っている。すなわち、自らの希望ではなく、相手に望まれ、承認された存在である自分を提示することで、自身の就労を意味づけていた。さらに、その就労を、「お金じゃないんだ」のように単に経済的な行為としてではなく、「喜んでやっている」「退職者の生きがい」のように自分自身の生きがいや喜びとして就労を意味づけていた。

退職移行期にある高齢男性は、＜社会的な位置の獲得としての就労の継続＞を行っていた。さらに、＜良好な健康状態のアピール＞をすることは、社会において十分役割を果たせる、すなわち就労を継続できる健康状態にある自分を提示することへとつながっていた。

3）社会的自己価値確認としての結びつきの維持

退職移行期にある高齢男性は、一方で就労を継続することにより社会的自己価値を確認しようとしていたが、就労による社会への参加度が徐々に縮小していく中、他方、就労以外の人との結びつきの中によりどころを求め、自分の社会における位置や価値の明確化を図っていた。

地を媒介（地縁）とした＜土地に根ざした結びつき＞には、幼馴染の関係や、現在の居住地における人間関係などが含まれていた。その地に居住し、役割を得ることで、そこでの自分の位置を確立し、自分の価値を確認していた。概して、居住歴の長さが関係の深さに影響しており、子供の頃から継続的にその地に居住しているものは、「名字でなしに○○ちゃんだとかそういう仲間」のように、社会的地位や就労上の関係が影響しない、強固な関係を築いていた。さらに、こういった＜土地に根ざした結びつき＞は、単にその人個人としての結びつきだけではなく、家族単位の結びつきや、家族を媒介とした結びつきも示されていた。また、就労を維持している退職者の中には、「勤めているもんで･･･地域とのかかわりっていうのはない」のように、結びつきの中心はまだ仕事仲間であり、＜土地に根ざした結びつき＞が弱いものもいた。

＜昔の仕事上の結びつき＞も、退職者の人間関係として重要な結びつきであった。これは、退職前に形成され、現在も継続している関係であった。一方では「営業関係にいた人を集めて、OBの会を創ってるの」や、「仲間が良くて････」と就労していた頃の良好な人間関係に基づく結びつきであったが、他方、「会社で偉かった人っていうのは、みんながどう思っているかわからない」「いざ溶け込もうと思っても、過去の背景とか････」「一応名のしれた会社を退職して････最初の1年ぐらいはいきいきとしていたんですけど、なんかねグループと気が合わなかったのか････最近3年目ぐらいになったら、あれは辞めたと」「就職してから死ぬまで、お付き合いを○○以外の人としない人が多い」といった、昔の地位や、会社での人間関係のこだわりへの影響も含まれていた。こういった昔の立場や昔の会社へのこだわり、すなわち、＜特化された結びつき＞は、新たな場における新たな結びつきの形成を阻害する要因ともなっていた。特定の集団との強い結びつきが、かえって他の結びつきを排除することにつながっていた。また、こういった＜特化された結びつき＞は、過去の就労関係からのみ創りだされるものではなく、「病院社会でもって、病院人間になっちゃう」「まとまっていると････」のように、それ以外の人や場との結びつきの中からも生じる可能性が示されていた。

血縁や婚姻関係に基づく、「妻の健康のほうがよっぽど心配」のような思いやりや愛情を含む、＜家族との結びつき＞も、自分の位置を確固たるものとし、自分の価値を確認させるものとなっていた。こういった様々な＜人との結びつき＞は、人が生きていく中で、よりどころとなる人間関係を形成し、その中での人との関わりや役割の獲得を通し、社会における自分の位置を確立し、社会的自己価値を確認していた。

また、こういった結びつきは単一、固定的なものではなく、時や場の変化に伴って移り変わるものであった。結びつきは、「仕事が忙しいんで、辞めたら」のように、就労状況の変化により＜土地に根ざした結びつき＞が強くなったり、「（土地を離れると）実際には気持ちが離れちゃう」や友人の死亡など、結びつきの対象の喪失と共に失われたり、「最初は頷くだけだった人と、だんだん挨拶ができてきて」のように、新たに生まれたり、「また接触すると思い出す」のように一度は失われても、再び復活するものであった。また、「川渡ったらもう家のことを忘れるし、川を逆に渡ったら会社のことを忘れる」のように、結びつきは同時期に並行的に存在することが可能であった。

Cummingら[8]は、離脱理論の中で社会システムの中から引退していく、正常な老化の過程について示している。その中で、離脱とは、個人と社会の構成員の間の多くの関係が離れて行く避けがたい過程であり、残された関係にも質的な変化が生じるとされている。ここでの結びつきの喪失などは、衰退的な変化を示す結びつきでもあった。しかし、結びつきは、単に衰退し、そのまま閉塞していくのではなく、その後新たに生まれ、復活し、発展的にも変化するものでもあった。すなわち、この関係は単に衰退という一方向に向かって変化するのでも、一つの固い結びつきが無くなると社会との結びつきが全て閉じてしまうのでもなく、いくつかの多様な関係の間を揺れ動き、常に変化し続ける柔軟なものであった。こういった柔軟な結びつきの中で退職移行期にある高齢男性は、社会における自分の位置を見出し、社会的自己価値を確認していた。

Ⅵ. おわりに

本研究では、大企業を退職し、退職移行期にある高齢男性を対象とし、現在の健康状態および健康を維持・増進するために行っていることについてインタビューを行った。健康を糸口としてヘルスプロモーションに関わる要因を明らかにすることを意図し、調査を行った。データを分析した結果、この時期にある高齢男性の健康提示の方法や、就労に基づく、もしくはそれ以外の社会における自分の価値の確認が、彼らのヘルスプロのーションにつながっていることが明らかになった。彼らのヘルスプロモーションをすすめていくには、現在行われているような、運動・栄養・休養・感染予防・ストレス対策といった機能面の健康管理に終始するのではなく、老いていく自分を納得し、社会との関係性を自分自身や周囲の変化の中で確認し調整するといったことが重要であり、そのことが結果的に彼らの健康を維持・増進すること、すなわちヘルスプロモーションになっていた。このことは、今後、彼らに対するヘルスプロモーション活動を展開していくうえで重要な示唆を与えるものである。

本研究では、「退職後のゆとり」のある比較的健康な退職移行期にある男性高齢者を対象としたため、今回の結果もこの範囲に限定されたものである。また、グラウンデッド・セオリー・アプローチの重要な分析上要件である理論的飽和化も完全でなく、探索的な研究にとどまっている。したがって、今後、本研究の分析結果をさらに精緻化するとともに、健康レベルや退職後のゆとり、就労状況などについて本研究の対象者とは異なった状況にある退職者を対象として研究を行うことにより、退職した高齢男性のヘルスプロモーションについて、さらに検討を進めていくことが必要であろう。

本研究に際し、インタビューに応じてくださった退職者の皆様に、心から感謝申し上げます。また、スーパーバイザーとしてご指導くださいました立教大学社会学部木下康仁先生、ならびに聖路加看護大学川越博美先生に深く感謝申し上げます。

引用文献

1) WHO Regional office for Europe：Ottwa Charter for Health Promotion, WHO Regional office for Europe,1986；島内憲夫訳：ヘルスプロモーション－WHO：オタワ憲章－,垣内出版,1990.
2) 厚生統計協会：国民衛生の動向,厚生の指標臨時増刊,49（9）,79,2002.
3) Whetstone, W.R., Reid, J.C.：Health promotion of older adults：perceived barriers, Journal of Advanced Nursing, 16（11）：1343-9, 1991.
4) Glaser, B.G., Strauss, A.L.：The Discovery of Grounded Theory：Strategies for Qualitative Research, Aldine Publishing, Cicago, 1967.
5) 木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチ－質的実証研究の再生,弘文堂,東京,1999.
6) 木下康仁：質的研究法としてのグラウンデッド・セオリー・アプローチ－その特性と分析技法,コミュニティ心理学研究,5（1）：49-69,2001.
7) Naidoo J.,Wills J.：Health Promotion; Foundations for practice, 2nd.ed. Bailliere Tindall, Edinburgh,72-90, 2000.
8) Cumming, E.,Henry, W.E.：Growing old：Process of disengagement, Basic Books, New York, 1961.